

ヤブガラシの戦略

園長 児嶋 草次郎

花壇のあちこちから勢いよく伸びる
龍のようなヒゲを持った植物
取っても取っても生えてくる
地中にまるでゲリラのトンネルのように 太くて丈夫な地下茎を持っている
あちこちから芽を出した時は
すでに縦横無尽に地中に茎を伸ばしており
こちらが油断すればあっという間に花や庭木をつるで被いつくす
「藪枯らし」とはだれが名付けたのか知らないが
ゲリラ草とでも呼んだ方がよいのかもしれない
どんな世の中であろうとも
藪原のような錯綜した雑居地の地下を 秘かに強く勇気を持って伸びていく
ヤブガラシの地下茎を見習いたいものだ
理想と信念と忍耐力とをもって前へ進もう 草莽崛起だ
生活力と自律力と志とをもって前へ進め 自己実現だ

(以下は、7月6日の児嶋虜一郎・登美記念式の時の挨拶に加筆したものです。)

本日は、猛暑の中、児嶋虜一郎・登美記念式に御出席いただきありがとうございました。理事長として一言御挨拶させていただきます。

今年は、戦後 80 年と言われます。石井記念友愛社にとっても、80 周年の年であります。この記念式は、創立記念日としても位置づけており、大事な 1 年となります。創立記念日と言うのは、過去と未来をつなぐ一日と言ってもよいのではないかと思います。組織はその目的を失ったら解散するしかありません。どういう思いどういう事情でこの石井記念友愛社が組織され、今までどういう歩みをして来て、これから未来へ向けてどういう志で進もうとしているのか、たえず自らに、各自が問い続ける必要があります。

つい数年前と比べると、世界の流れが急激に変わって来ているように感じます。ソ連が崩壊し、アメリカ強の地球になり、自由民主主義社会が、地球は一つという理想のもと、21 世紀は世界の隅々まで広がっていくという妄想を描きました。

しかし、ロシア・ウクライナ戦争を機に、それらの様相がガラガラと崩れ、今やまた弱肉強食の時代に逆戻りしていくのではないかとというような恐れを抱かせる世界の情勢となって来ています。

先ほども申しましたように、今年は、太平洋戦争で日本が破れて戦後 80 年の年であります。

天下太平の 260 年ほど続いた江戸時代が終り、明治革命によって、それまでの伝統的な武家社会の価値観が崩れ去ります。その欧米を追いかけ始めた頃、社会から落ちこぼれた子供たちの救済活動と

言ってよいのが石井十次先生が明治 20 年から始めた孤児救済・教育事業だと言ってよいと思います。

その後文明が欧米と肩を並べるようになり、成り上がった日本は欧米に後れをとるまいとアジア方面に進行・侵略することになります。そして結局、欧米相手に戦うことになり、先ほどの明治 20 年から 58 年後昭和 20 年、原子爆弾 2 個を初め、数えきれないほどの爆弾を落され、我国は 310 万人を越える犠牲者を出した上に国土を焼け野原にされて無条件降伏をしました。その時の孤児たちを救済するために活動を始めたのが、児嶋琥一郎でした。

この戦争でアジア太平洋地域だけでも 2000 万人以上の方々が亡くなっているのに、人間とは愚かなもので、時がたつと同じあやまちを繰返していきます。今ロシアがウクライナに侵略し、中東でも戦争が始まっています。このアジアにも一触即発の地域があります。

戦後 80 年、日本は常に世界平和を願い経済の発展を優先し、社会の安寧を謳歌して来ました。生活も豊かになり、私たち児童福祉関係者は、社会のセイフティーネットとしての使命役割をはたして来ました。このままこの平和と豊かさが永久に続くのではないかと信じている部分もあります。

しかし、一方において、破綻の兆候も感じ始めています。まず日本が戦後すぐからずっと模範として追いかけて来たアメリカが、今までのグローバリゼーションに自ら反旗をひるがえし始めて来ているということ。ロシア・ウクライナ戦争もなかなか終わらず、ロシアもグローバルサウスの国々の心情的な支援も受けながら、占領地をほぼ国有化して来ているということ。この戦争や中東の戦争に関しても、国連はほぼ機能不全であること。

そして我が国を見つめると、国家の向かうべき方向をしっかりと示し、舵取りを確実にすべき政治家たちが国民の信用を失って来ていると感じることが多くなって来ていること。若者たちが政治に関心を向けなくなってくることは、非常に危険なことだと思います。

不登校小中児童が 34 万 6000 人いるそうです。引きこもりに至っては、146 万人だそうです。日本の未来を担うべき若者がこんなに多く道に迷い引きこもるという現象は憂慮すべき事態ではありますが、有効な対策は見られません。子供たちの自立に関する考え方もアメリカの価値観である個人主義が浸透したことにより、ただ守ることだけにエネルギーが注がれているように感じます。

国や行政の政策・施策と現実との間にミスマッチ、乖離が生じて来ているのも事実です。

そういう世界情勢、日本の状況の中で、私たち石井記念友愛社の今後の生きるべき道を考えることが、この創立記念の日のやるべきことです。

1 社会的養護については、「友愛通信」等で何度も書いたり言ったりして来ています。宮崎県社会的養育推進計画に従って、令和 11 年度までに里子を今より 100 人近く増やす計画です。非常に単純なことですが、施設の児童数を 100 人ほど減らす計画が一方にあります。これは、国の達成目標にできるだけ合わせようとする宮崎県の施策であります。その向こうに子供たちの幸せな生活が待ち構えているのか。否です。むしろ逆の結果が出て来るだろうと予想しています。

施設の児童数を 100 人減らすということは、家庭優先の原則に従ってできるだけ子供を施設に入れない、また入所期間をできるだけ短くするという施策が付随して来ます。その結果どうなのか。今友愛園の卒園生の大学等への進学率は 58%ですが、これは急激に下がってくる。大学等への進学は学力だけの問題ではありません。基本的な生活習慣等の生活基盤を身につけることがまず必要です。人間不信を払拭して自己肯定感を高め、世のため人のために自分がんばれるという志を養っていくことが次に大事です。忍耐力も自己コントロール力も施設生活を通して身につけていく必要があります。そのような総合的な力を身につけた結果として大学等への進学なのです。それを実現させるためには 5 年はほしい。

この施設の戦略と国の方針とは、まっこうから対立します。今国がアレコレ進めている大学等への進学支援は、小手先の施策であり、施設生活が短くなれば、まず、志を描くこと自体が困難となります。その結果、施設は荒れるしかなくなっていくことでしょう。

もっと重要な問題が出て来ます。支援を必要とする多くの子供たちが地域に取り残されていくのです。先ほど、不登校小中児童が 34 万 6000 人と申し上げました。一昔前までは不登校児童の多くが施設に入所し、集団の力によって、次の日から元気に登校していました。今は不登校児童も多くなり、児童相談所の管轄外となって来ております。集団の力動を活用するという発想も個人主義の時代となり個別に対応しようとするからです、なかなか改善には向かいにくい状況となっています。

施設を縮小しようとするよりも、不登校児童を積極的に受け入れて改善に貢献すべきと私は考えるのですが、縦割りの行政組織の中では思い浮かばないようです。

とにかく、今のままでは、施設はいらないという価値観が徐々に浸透していきます。私たち社会的養護に取り組む者は、危機意識を持ってその課題に向かい合っていかなければなりません。

- ① まず施設養育について、そのメリットをしっかりと国民に示せるように整備し、指導体制を一貫性あるものとして確立すること。
- ② 結果を出すこと。その結果の一つが、大学への進学率でしょう。社会に貢献する人材養成施設として位置づけ直すことで、政治家の人たちの認識も変ってくるでしょう。
- ③ 地域に取り残されている子供たちへの対応を地域行政とともに考えていくこと。周辺の市町と連携し合うことで、包括的に関わることも考えられます。

2 次に保育園関係です。保育園とは、働くお父さんお母さんのための子供のあずかり施設でした。

石井記念友愛社が保育園を開設するようになったのには、すさまじい、また悲しい事情がありました。この茶臼原地域には、戦後 300 世帯以上の開拓者たちが全国各地から集まって来て、裸一貫で茅や雑木のおい茂る大地にクワ一本で挑みました。岡山孤児院時代に独立した人たちも戦いを生き抜き、戦後再スタートしました。開拓は家族総出の作業であり、家や農地の隅々に残された幼児に死亡事故等が起きるようになり、農家の方の切実な願いとして設立されたのが、石井記念ひかり保育園であり、石井記念のゆり保育園であります。

その後様々なニーズに答えていくうちに、戦後 80 年で 10 か園の保育所を経営するようになっていきます。

今、過疎化、少子化が急激に進んでいます。特にコロナ後、少子化は予想もしなかった数字を示すようになって来ています。

国や行政が手をこまねていたわけではありません。様々な少子化対策を講じて来ていますが、その流れにストップをかけることはできていません。石井記念友愛社の 10 の保育園の中で入所児が少なくなって経営の厳しくなって来ている所もあります。これからどうすべきなのか。ニーズがなくなればその施設の使命は終る。これは当然ことです。しかし、そのニーズとは何かについて考える必要があります。

石井十次は、なぜ 400K 以上も離れたこの地に、岡山から多くの犠牲を払っても施設を移そうとしたのか、移したのか。それは岡山の地に立ってみればよく分かるのですが、教育のためでもあるのです。明治 27 年には、この地が教育にとって最も適当な所であると言っています。

この大自然の中で子供たちの感性を思う存分育てよう、そういう思いがあったわけです。今は保育園も教育的な関りを期待されています。生まれ落ちて小学校に通い始めるまでの 6 年間は、人生の中で一番大切な期間と言ってもよいでしょう。今は親が保育園を選ぶ時代ですので、感性を養う

教育としての使命がまだ残っていると思います。

- ① 保育園は非常に地域性の強いものです。その地域の歴史、文化、自然環境に保育内容は左右されると言ってもよいでしょう。そこをまずしっかり把握することで、その保育園のメリット、デメリットは明らかになると思います。
- ② その地域の方々との連携も重要になります。その地域の行事、文化への参加・継承等も子供たちの感性を養うには重要であると思います。子供たちを地域で育てていくための和・輪を作っていく必要があります。
- ③ 生き残っていくためには、保護者の方々から選ばれた保育園にならなければなりません。その地域の文化、自然環境の独自性を発掘し、しっかり色んな手段を使ってアピールしていくこと。新しい出会い、縁を作っていくためにはそれしかありません。

それぞれの保育園の園長、保育士たちが危機意識を持って取り組んでほしいと思います。我々は民間の事業所であり、その存在価値がなくなれば、閉鎖するしかありません。

3 もう一つ障害者支援の事業所も石井記念友愛社はその経営しており、これについても課題を述べておきます。

石井記念友愛社は、岡山孤児院からその土地を引き継いでおり、今でもこの茶臼原に 35 ヘクタールの山林、田畑を所有しています。私たちの先人たちが残してくださった福祉・教育のための財産があります。これらを戦後最近までは、友愛園の子供たちが守り、教育に生かして来ました。施設も小規模化の時代となって来ていますので、近い将来は、主に障がい者の方々の自立支援のために活用したいと考えて来ました。障がい者施設を設立してもう 16 年になりますが、まだまだ道半ばです。

人間は自然の一部であり、自然の中で人類として進化して来ました。人間としての文化を築いて来れたのは自然と共生ができたが故です。この大自然の中に、人間が人間として生きるための知恵、技術、アイディアは数かぎりなく秘められています。もっともっと挑戦的に取り組んでいかねばなりません。

最近、大都会より M & A や譲渡を誘う文書が親展で次々に届きます。社会は見た目には平和ですが、大きな歴史の転換点に来ているのかもしれないとも感じます。次の時代にも組織としての使命感を持って生きのびていくためには、今、何をしなければならないのか、みんなで考えたいと思います。